

第16章 成長性の分析

(これは簡単です・気楽にいきましょう)

本日のテーマ

- ① 成長性分析の意義？

- ② 実数比較と比率比較
試験では回転率を重視しよう

- ③ 増減率分析の実際
完成工事高増減率
付加価値増減率
営業利益増減率
経常利益増減率
総資本増減率
自己資本増減率

① 成長性分析の意義？

B/S 分析（静態分析）

P/L 分析（動態分析）→でも所詮は1年間に過ぎない

有価証券報告書では最低2年間

時系列分析は重要

② 実数比較と比率比較

実数分析→売上高や従業員数の実数の増減を分析

比率分析→分析比率を比較（規模に左右されない⇔規模わからない）

成長率＝当期実績／前期実績（基準年のケースもある） 対前年比等と表現される

増減率＝（当期実績－前期実績）／前期実績

前期 100→当期 120

成長率 120%・増減率 20%（成長率－100＝増減率）

③ 増減率分析の実際

一つの指標だけで判断はできない。財務分析はバランスが重要！

完成工事高増減率（利益の源泉である売上高の比較）

付加価値増減率（生産性）の比較）

付加価値＝売上高－材料費－外注費

∴社内の人件費などが増えて利益が出ていなくても付加価値増えている可能性ある
バランスが大事

営業利益増減率（本業利益の比較）

本業の収益力の比較

経常利益増減率（本業＋財務収支＝経営政策の比較）

もっとも重視すべきという意見も多い

総資本増減率（他の指標とのバランスを考慮して比較）

他人資本の増加が悪いという訳ではないが・・・支払利息・元本返済の重圧などの要素あり

自己資本増減率（ 〃 ）

利益の内部留保などを示すので増加は良い傾向

但し、企業規模が大きくなれば資本家からの配当要求（資本コスト）が高まる
やはりバランス感覚が重要といえる

★工事完成基準の下での特別な比較項目

工事完成基準→完成するまで収益計上できない→1億円の売り上げのうち90%完成していても売上は0

これでは、投資家からみて正しい評価ができない

そこで

有価証券報告書

→当期施行高＝当期売上＋次期繰越施行高（売上）－前期繰越施行高（売上）

<マトメ>

16.1 成長率と増減率の相違点

成長率は基準年度に対する割合→例えば

増減率は基準年度からの増分の割合→例えば

16.2 完成工事高増減率と経常利益増減率の関連と役割の相違点

P/Lイメージを考えながら論述しよう

完成工事高は規模を表わす点で重要だが、利益（特に本業+財務収支の結果である経常利益）の増減は経営上のリスクの早期発見などの点で重要である。

16.3 計算